

- 自ら考え、表現できる人（創造）
- 仲間とともに高め合える人（共生）
- 心身ともにたくましい人（健康）

## 松明あかし大成功 天下無双の三中松明燃え上がる

11月12日（土）に須賀川の伝統行事「松明あかし」が開催されました。本校は今年度で25回目となる松明行列への参加でした。「松明あかし」への中学校の参加は三中が先駆けであり、当日の行列中も温かい応援をたくさんいただき、地域の方にも三中の松明行列が愛されていることを感じました。

「三生生にとって松明あかしは大きな行事、松明あかしでの達成感がさらに生徒を成長させる」と、以前本校に勤めていた先生方がおっしゃっていました。

まさにその言葉どおり、松明あかしを通して生徒たちは大きく成長しました。当日までの準備、練習はもちろんですが、当日一トンもの重さのある松明を五老山まで運ぶのは並大抵の苦労ではありません。学校での練習は平らなところでしかできません。しかし、当日は下り坂もあれば上り坂もあり、練習のときとは比べものにならない重さが肩にのしかかります。生徒たちは最後まで肩の痛みにも負けず歯を食いしばって運びました。最後の上り坂を登り切り、五老山山頂に到着した時、生徒たちの達成感に満ちた笑顔があふれました。中には感極（かんきわ）まって涙を流す生徒もいました。力を合わせてやり遂げることのすばらしさを生徒たちが実感した瞬間でした。



夜に再集合して行われた松明への点火と応援では、生徒たちが見守る中松明に火が点火されると、三中の松明は生徒たちの思いをいつまでも残すかのようにじっくりとしかも勢いよく燃え上がりました。そして、何より応援での生徒たちの笑顔いっぱいの姿に松明あかしに取り組んで本当によかったという思いをいただきました。

応援団長の「最後に校歌を歌って終わりましょう」のかけ声のもとに歌った校歌はこれまで私（教頭）が聞いたどの三中の校歌よりもすばらしい、三中への思いと三生生である誇りを感じた歌声でした。

今年の松明あかしの三中のテーマは「天下無双（てんかむそう）」。「天下無双」とはこの世に並ぶものがないほどすぐれていることという意味です。松明行列も、松明の炎も、生徒たちの笑顔もまさに他に並ぶものがないすばらしいものになり、生徒たちにとって一生心に残る一日となったと確信しています。この達成感を今後の学校生活、そして三年生の進路実現に向けての取り組みへとつなげていってほしいと思います。

（この記事は教頭が担当しました。）



## 工夫を凝らして残滓(ざんじ)が減少

本校の給食業務には、一人の栄養技師と3人の調理員であっています。4人で調理法や味付けも相談しながら心を込めた給食の提供に努めています。

毎日校長と栄養技師が給食の30分前に検食をするのですが、9月の記録簿にはこうあります。

「冷凍食品だけに頼らず、学校給食にふさわしい献立に心がけたいと思います。香味和(こうみあ)えは生のショウガを千切りにして手作りドレッシングに風味を出して和えました。1年生から“おいしい和えものだった”とうれしい言葉をいただきました。」

このころから残した給食の量(残滓)を確認するのが楽しみになったと言います。そして、11月11日(金)は「松明手巻きずし」でした。この日は、こう書いています。

「酢飯(すめし)だったので、生徒は残すだろうと思っていましたが、ご飯は1~3年全クラスで『0』でした。涙が出るほどうれしかったです。明日(松明あかし)は頑張っしてほしいと思います。」



「給食は食育の生きた教材」と言われます。作る人に思いを馳(は)せてほしいのは、家庭も学校も同じですね。

## 高橋(2年)表彰式で防火宣言



写真は福島民友新聞

須賀川地方広域消防本部の火災予防絵画・ポスターコンクールで、2年 高橋愛奈(あいな)さんが優秀作品賞を受賞しました。

11月8日(火)に同本部で行われた表彰式で、今泉一二消防長から賞状を手渡され、受賞者を代表して高橋さんが火災予防宣言を發表しました。

11月9日~15日までは秋の全国火災予防運動でした。今年の標語は「消しましょう その火その時 その場所で」です。期日は過ぎてしまいましたが、ますます火気の使用が頻繁(ひんぱん)になります。次の点を参考に「我が家の火災予防宣言」を実施してはどうでしょう。

- 火遊びは絶対にしない。
- 火気使用後は必ず消火を確認する。
- 住宅周辺に可燃物を置かない。
- いざという時に消火器を使えるようにする。
- 家族、近隣の高齢者への声掛けに努める。

## その8 社会の中での教育(家庭教育文献紹介「親でなければできない教育」より)

「その1」から「その7」まで家庭で行う教育について紹介しましたが、これだけでは不十分です。さらに必要なのは社会の中で行う教育です。つまり、大人が必要に応じて、よその子に対し援助したり指導したり、ときには叱(しか)ったりしてやらなければならないのです。大人、特に親たちが中心になって力を貸し合って進めていくべき問題であるにもかかわらず、その自覚は希薄になってきているようです。

「よその子に対する教育」のポイントとしては、(1) その場で教える、(2) みんなのものも自分のものと同じように大事にしなければならないことを教える、(3) 気づいた人が実行する責任があることを教える、(4) あとからくる人のことを考えて行動することを教える、(5) 理由をはっきりさせて教えるなどです。ときに行動で示したり、立場を変えて考えさせたりしながら毅然(きぜん)とした態度で教えます。



最近、他人に迷惑をかけるような行動を子どもがしていても「恥ずかしいので、何もできなかった」という親が増えています。中には「他人の前で子どもを叱(しか)ったりしては、周りに不快な感じを与えるのではなかろうか」と考える人もいます。しかし、他人が迷惑をしているときに放っておくことが無責任であり、不快なわけです。また、叱(しか)ったときに周りが不快な思いをするのは、不当なしかり方をした場合です。親としては見ている他人にも納得(なっとく)してもらえようような対応をする責任があるのです。

また、自分の子どもが他人から叱(しか)られたときはどうでしょう。不機嫌(ふきげん)さが顔色や態度に出たりすることはないでしょうか。親が叱(しか)らないことを他人が叱(しか)るとするのは誰だってやりたい役ではありません。他人の子どもでも社会の基準に照らして誠意をもってほめたり叱(しか)ったりしてもらったときは感謝の言葉を伝えることを習慣にしたいものです。そのような大人(親)どうしの連帯(れんたい)意識が子どもの育ちに有意義なのです。子どものことで大人どうしがトラブルになるなどは、とんでもない考え違いです。